

令和7年度 第1回図書部会 【概要】

日 時	令和7年8月28日（木）午後1時30分～3時00分
場 所	総合文化センター412号室
出席者	委員7名（うちオンライン1名） 事務局 酒田市 社会教育課長ほか3名 ミライニ 所長
1 開 会 2 課長あいさつ 3 報告・協議事項 (1) 第4次酒田市子ども読書活動推進計画（素案）について 資料1 ○委員 ・子どもの読書活動の推進に関する法律第2条の基本理念には「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。」と謳われており、この条文をどのように具体的に解釈するかが大事である。鶴岡市も第3次計画を策定中だが、委員の中で勉強会を開いている。解釈し、相互理解することで、計画が具体化する。 ・山形県の第4次計画では、3つの柱と新たな5つの取組みを新規事業として立ち上げている。国や県の計画との整合性を図らなければならない。 ・「ミライニを中心に社会全体で子どもの読書環境を整備する」という動きは酒田市独自の特色的な取り組みであり、他の市町村にはないもの。ミライニは指定管理によって運営されているため、民間の力と連携した取り組みが期待され、大変特色がある計画が完成すると思う。そのため、計画の位置付けについて、酒田市で力を入れて取り組むことを詳しく明記するとわかりやすくなると思う。 ・計画の対象について、本来は法律で0歳～18歳と定められているが、計画に大人も含むのは非常に良いこと。鶴岡市の第2次計画では、冒頭に市長の	

メッセージが掲載されている。取り組みの主体は大人を含むすべての市民というところをもっと強調して良いのではないかと思う。また、パンフレット形式の計画概要の作成や、マタニティ向けの周知を行うことで、生まれる前から大人になっても読書活動を育んでいこうという意識の醸成につながる。

○委員

- ・不読率について、前回計画策定時のアンケート調査よりも小学生、中学生共に増加している。令和2年度と令和6年度を比較している訳だが、令和2年度はコロナ禍にあり、それよりも前のデータはあるか？コロナ禍の影響で令和2年度の数値が良いのかと思った。

○事務局

- ・過去の調査から0から4冊と設問を変更したため、参考値として不読率のグラフを掲載している。

※議事録作成時、第3次計画の小学生の不読率に誤りが判明。

誤3% ⇒ 正3.5%

○委員

- ・アンケート結果として確定的な数値を出してしまうと誤解を生むため、あくまでも参考値であることと、詳しい説明を記載しなければならない。

○委員

- ・0から4冊と回答を2冊と考えて、割合をとるという計算で比較できると思う。計算の結果が近似していれば、傾向の分析ができると思う。

○委員

- ・コロナ禍で子どもたちが自宅で遊ぶ機会が増え、メディアとの関係が密接になった。メディアを使わないのではなく、メディアコントロールの力をつけようと各学校が取り組んでいる。
- ・コロナ禍を経て、実際に本離れは進んでいると感じる。小学校低学年だと先生と一緒に学校の図書館から本を借り、家に持ち帰って家読をする。しかしながら、各家庭によって差があり、家族と一緒に本を読む子もいれば、適当に読んで感想を提出する子もいる。活字離れも進んでいる。

- ・メディアを介した子ども同士のトラブルは増えており、直接会話をせずにオンライン上で喧嘩に発展したことがあった。
- ・小学校は朝読書を継続している学校が多いが、中学校では朝読書を廃止している学校も増えている。子どもたちの語彙力や読解力が低下しており、計画の目的の「人生をより深くより豊かに生きる力を育む」読書が必要である。学習指導要領でも「生きる力を育む」という文言は謳われており、生きる力を読書によってどのように支えるかを本会議で議論していきたい。
- ・国や県の動向と酒田市の現状を照らし合わせ、各学校や家庭の取り組みも取り入れながら施策を練っていくことが大事である。

○委員

- ・子どもの読書活動が減少している一つの要因として、スマホやタブレット、ゲームがある。しかしながら、これは子どもだけの問題ではなく、親もスマホ等に熱中してしまっている現状があり、家庭では親が自分をどう律して本を読むかが子どもの発育や人生に大きな影響を与える。
- ・A I 機能を使い、自分で考えずに課題や読書感想文を提出する子もいると聞く。これからの時代、A I を上手く使い分け、自分で考える力を育んでいく必要がある。

○委員

- ・A I は統計の中から文言を選んで文章を作成する。A I を恐れている人もいるが、A I を超えるには人が物事を考えて想像する力を育む必要がある。例えば、小学生や未就学児童に対して、読書や読み聞かせの後に、感想を絵や文章として書き起こすという方法がある。これは読むだけの読書ではなくリアル（体験）を組み入れることで考える力を育み、読書を楽しい体験として習慣付ける訓練である。酒田の子どもたちが「自分で考える人」に育つことで、将来押し寄せるA I の波を乗り越えてもらいたい。
- ・ヨーロッパでは、午後8時からのテレビ番組には大人マークがつく。子どもは8時前に自然と寝る準備を始め、8時にはベッドに入って親から読み聞かせしてもらったり、自分で読書したりする。そして、週末には親子で本屋に行って新しい本を買うというサイクルができています。世界と比較した時、日本の読書週間が一番低いとの統計データがある。ヨーロッパでは宿題の〇つけや感想文等の簡単な添削は親が担うが、日本は宿題など家庭内での学習や

読書に親があまり関わらず、教員の負担が大きい。今すぐに親の関りを増やすことは難しいと思うが、このような小さな取り組みが今の日本には全く足りていない。

- ・勉強が苦手な学生の傾向として、読書をしない子が多い。また、試験勉強はできるが、まとめ作業ができない人もいる。「まとめる力」は読書や想像する訓練をとおして培うことができる。現代では、わかりやすさばかり追求されており、同じようなフォーマットで書かれた書籍やインターネット記事を見かける。試験では点数が取れるかもしれないが、横断的な考え方や比較、分析する力を育む取り組みが重要である。
- ・市内の中学校では、宿題のない学校がある。教員の働き方改革としては正しいと思うが、学力の低下につながる可能性がある。小学生期に親や先生、地域の方から支援をいただき、自主的な読書や学習の習慣を定着させることで、中学生期に宿題がない分を補う取り組みが必要である。子どもの読書量を増やすことは、新しいものを生み出す力に繋がるため、酒田市の生き残りをかけ、取り組んでもらいたい。

○委員

- ・S L A（全国学校図書館協議会）の高校3年生を対象にした学校図書館に関する調査項目の中に、家庭での読み聞かせについての問いがあった。アンケートの結果から、親からよく読み聞かせしてもらっていたという生徒は、友達と本の話しをする子、家庭でも本の話をする子が多く、読み聞かせと連動していることが読み取れた。家庭、学校でも読書が話題となるきっかけづくりや環境づくりが必要である。
- ・昨年の調査によれば、読書が好きな高校生の割合は男子が 67.6%、女子が 78.7%だった。また、読書が大切だと思っている割合は 90%を超えていた。読書が好きな子がこれだけいることは希望である。読書率の向上には、読書時間を確保することと、子どもたちの心を揺さぶる本との出会いが必要であり、幼少期から読書習慣を身につけることで切れ目ない読書活動の形成につながる。
- ・市立図書館でも高校生の動線にヤングアダルトの本を配架するなど工夫しており、このような取り組みを充実し、不読率の低減につなげてほしい。

○委員

- ・ 幼少期から本に親しむこと、小さな積み重ねが大事である。

○委員

- ・ ブックスタート事業は、0歳時からの読書機会を切れ目なく提供し、活動を推進する働き掛けと環境づくりである。酒田市の第2次計画では、マタニティ教室を継続拡充することを計画に明記していた。これは素晴らしいことである。胎児の時から読み聞かせは始まるため、切れ目ない環境づくりのために関係課と連携してマタニティ教室を今回の計画に記載してもらいたい。
- ・ 現在、学校における図書館を使った学習が停滞している。学校教育の中で授業改革はとても大事であり、学校教育課でイニシアチブを取るべき。答えをすぐ見つける方に走りがちだが、問を立てることが学問であり、答えを探すことではなくて答えにたどり着くまでの過程を大事にするのが学習である。特に調べ学習では図書館の本をもっと使ったり、図書館の中で授業したりすることが大事だと思う。子育て支援課や健康課、学校教育課と連携して計画を策定することが課題である。
- ・ S L A 学校図書館スーパーバイザーを務めている福田孝子先生が鶴岡で「A I 時代における子供の読書と、図書館の役割を考える」というタイトルで講演された。その中の興味深い話として、子どもたちに1人1台ずつ端末が与えられているが、世界では見直しの傾向にあるというもの。スウェーデンでは、国の方針として紙と鉛筆に戻ろうという動きがある。アメリカでは半分の州が筆記体、つまり手書きをきちんと教えるようにしていこうという動きがあり、フィンランドでは自治体によって端末を使用しないようにした。オーストラリアでは16歳以下のSNSを使用禁止にする法案が可決された。コンピュータやA I は手段の1つとして使う分には良いが、長時間の使用による健康被害も多く、小児科の医師も警鐘をならしている。子どもたちや保護者に対して、世界の情勢や子どもの健康などを交えて紙ベースの資料をもっと大事にするよう理論立てて伝え、啓発することが大事である。第4次計画の中には、啓発活動の充実も取り入れてもらいたい。

○委員

- ・ 日本はA I の活用が遅れている一方で、子どもも大人もスマホの使用時間が異常に多い。また、学力など様々な指標が低下しているが、改善するには考える力が必要である。

- ・スマホについては、使い方の教育が必要である。コラボレーションツールとして使用している企業もあり、使い方を知らないと会社の面接等で不利になる可能性がある。
- ・学生に対して、色々な話を聞いて絵に表す学習をさせているが、今の子は総じて苦手である。小学生にも同じことをさせてみたが、同様にイメージすることが苦手である。想像力をつけないと、新しいことは生まれない。自分の意見を伝える時に、文字や音声、図を使うことを学ぶ仕組みをつくっていききたい。
- ・スマホでゲームをするばかりではなく、有効に使う教育が必要である。子どもたちはスマホ以外に楽しいことがあれば、自然にスマホから離れることができる。一方で、いじめなどが原因でひきこもりになってしまった子の中には、ゲーム内で会える友達と話すのが楽しいため、ゲームを続けたいと思う子もいる。

○委員

- ・図書館業界全体の話として、読書バリアフリーの観点は欠かせない。読書バリアフリーの推進は必ずしもDX化だけではなく、アクセシブルな書籍を整備することや、障がい者または支援団体の意見を図書館運営に取り入れることも重要である。大きな事業でなくとも、何かできることに取り組むべきである。例えば、「多様な子どもたち」というキーワードを計画に入れてもらいたい。
- ・読書手帳について、酒田市では乳幼児版と小学校低学年版があるが、小学校高学年～中高生版はない。高学年になるほど不読率が高くなる傾向にあるため、読書へのインセンティブの付与として、小学校高学年や中高生にも、何か「本に親しむ機会を増やす」取り組みがあってもいいのでは。読書手帳を継続したり、手帳が次の冊や次のステップにいくときにプレゼントしたりする取り組みがあっても面白い。

○委員

- ・地方在住のひとり親家庭の子どもの体験教育が減少しているというデータがある。そのような環境の子どもたちの新しい体験として、読書が一助になれば良いと思い、長期休業期間中の子どもたちをミライニ連れてくるという新たな取り組みを提案したい。各小学校とミライニ間をバスが巡回し、子ども

たちは小学校に集まり、小学校から自宅へ帰るというもの。ミライニ来れば、子どもたちは自然と本を読むことが予想される。親は仕事を休む必要がなくなり、送り迎えの心配もしなくて良くなる。子どもは体験が増え、読書活動の推進にもつながる。社会教育課が子ども読書活動推進計画を策定する意義として、学校教育でカバーしきれない部分を考えるという観点があり、そのために学校の先生たちに集まっていたいただいている場だと思う。

○委員

- ・子どもたちの居場所づくりにつながる提案である。

○委員

- ・重点項目の数値目標について、小中学生の不読率0%という項目があるが、現実的な数値に変えるなど、もっと議論する必要がある。

(2)その他

質疑なし。

4 閉 会

以上